
鎖

澤田リナ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖

【Nコード】

N3822E

【作者名】

澤田リナ

【あらすじ】

ドメスティックバイオレンスはあなたの身近に存在します。これを読んで少しでも何か思っ頂ければ幸いです。

プロローグ1（前書き）

暴力的な内容が含まれている為、苦手な方はご遠慮下さい

プロローグ1

歪んだ愛情と依存…ドメスティックバイオレンスDVの実体験本当は私を繋ぐ鎖なんて存在しなかったのかもしれない…

ただあなたの一瞬の優しさにすがりついていただけなのかもしれない…

たった5ヶ月…

彼と過ごした期間はたった5ヶ月だった

「それ」

が始まったのは付き合い始めて一カ月過ぎた頃だった。

ほんの些細なきっかけで彼は豹変した

頬が腫れ上がる程の平手の原因は

「私の仕事が終わるのが10分遅かったから」

だった腫れ上がった頬を抑えて私は呆然とした

（なんで？なんでそんな事で殴られるわけ？意味がまったくわかんない…）

ただただ頭の中を整理する事に専念した

自分に過失があるのか、殴られたのは現実なのか…そんなことを思いながらふいに彼を見ると、先程までの興奮し怒りをむき出しにした彼の表情はどこにもなかった。

かわりにあったのは、自分の右手をじっと見つめ、青ざめた彼の今にも消えてしまいそうな表情だった

「ごめん…ごめんリナ…俺…ほんとにリナに早く会いたかったから…」
潤んだ瞳で呟いた。

「だからって手を上げるとかって…アリなの？」私の手は怒りと恐怖で震えていた。

(…怖い…でも…遅れたのは事実だし…でも殴るとかは…)

トオルは涙を流して私の頬に触れようとした。
ビクッ

私の身体が強張った。

トオルは悲しそうな顔をしながら言った

「そうだよ…怖いよね…本当に…本当にごめん…ただリナの事が好きだけなのに、好き過ぎて不安で不安でしょうがなくて…ごめん…ごめん…」

涙ひぽ口ぽ口と落として自らの手に爪をたてる。見ていられず、私が止める

「遅れてごめんね。私が遅れてしまったから怒ったんだよね…」

トオルの手を握って謝ると強く握り返し、私を抱き締めてトオルは泣き崩れた。

「愛してる…愛してる…リナを愛してるよ…」
泣きながら囁く
愛の言葉を私はただ聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3822e/>

鎖

2010年12月25日02時40分発行